

「奄美豪雨災害～あまみエフエムが行った

災害放送の情報共有と感情共有～」

特定非営利法人 ディ！ 代表理事 麓 憲 吾

はじめに



＜災害放送の局内の様子＞

「不安の共有が安心につながる。」そのようなかつて、出会ったことのない感覚を認識できたことは、平成22年の奄美豪雨災害時の最中である。土砂崩れで、道路が寸断し、孤立する集落。河川が溢れ、家屋が冠水し、学校の体育館や公民館へと避難した住民。一般電話や携帯電話の不通、停電による暗闇と不安の中でラジオと向き合うリスナー。そこへ私たちは、何を注ぐことができるだろうか。災害時の情報伝達というラジオ放送の中身をどのような内容や表現、具合、タイミングで伝えれば、リスナーの行動を促し、心の落ち着きを癒すことができるのだろうか。それは、伝達力の前に理解力が求められ、リスナーの今、置かれている状況や心の状態への受信感度を高め、想像することが、私たちあまみエフエムの災害放送を組み立てる上で、大切なミッションとなった。

今回の奄美豪雨災害は、あまみエフエムが所在する名瀬地区は被害が少なく、住用地区、龍郷町、大和村などを中心に局地災害であったという条件と、県本土から380km離れた海外離島という条件下のコミュニティFMが行った災害放送ということの一例として、あまみエフエムの災害放送の経緯や内容、役割と、また、あまみエフエムの代表責任者として、総指揮という立場の判断やその都度感じ、考えたことを報告する。

1、あまみエフエム ディ！ウェイヴ

平成16年11月にあまみエフエムの運営会社となるNPO法人ディ！を設立し、送信技術などのハード面のサポートを地元通信会社の株式会社奄美通信システムが行い、放送制作のソフト面のサポートを有限会社アーマイナープロジェクトが行い、開局準備体制を整えた。その後、法人設立から2年半を経て、平成19年5月1日、総務省九州総合通信局管内離島初となるコミュニティFM あまみエフエムディ！ウェイヴが、民設民営により開局となった。

奄美のアイデンティティ形成と感化を目的に、島に島を伝えることの手段として、シマッチュのシマッチュによるシマッチュのための島ラジオは、奄美の自然・文化・歴史をはじめ、島の生活情報に特化したラジオ局である。



＜あまみエフエムの外観＞

コミュニティFM自体は平成4年に制度化され、各自治体を基本とした聴取エリアをカバーする地域FM局となり、あまみエフエムは、奄美市を対象としたコミュニティFMと位置付けられる。

かつての阪神淡路、中越、中越沖地震などで、地元のコミュニティFMが地域密着で災害放送を行ったことは、各所より伺い、私たちあまみエフエムも台風の常襲地帯であるラジオ局として、開局準備段階より常に災害対応をスタンバイすべきという姿勢は構えていた。実際、開局後の台

風接近時は、名瀬測候所などからの情報をもとに、事前に予想経路をある程度読むことができ、リスナーへの停電対策や食料確保の準備など、注意喚起のアナウンスを行い、あまみエフエム自体もスタジオ、送信所の発電機等の電力確保や、スタッフシフトなどが事前に計画立てることができた。

奄美大島は、降水量が多く1年の半分以上が雨となり、国立公園にも指定された奄美大島の豊かな自然の生態系に潤いを与えている。またこの島で生まれ育った私たちにとっても、幼いころから土砂降りによるトタン屋根に落ちる雨音は、心地よい眠りへと誘うものであった。

2、奄美豪雨災害

（1）被害の概要

あまみエフエムは、開局2年後の平成21年に奄美市との防災協定を締結し、その翌年、平成22年5月、鹿児島県と奄美市による地域振興推進事業を活用し、笠利地区・住用地区に中継局を増設、聴取エリアを拡大した。

それから約半年後のことである。平成22年10月20日。奄美は、豪雨災害に見舞われることとなった。台風13号の影響により雨雲が次々と発生し、長時間大雨を降らせる状況が続いた。



＜被害のあった住用地区＞

10月18日から20日までの総雨量が800ミリメートル。浸水被害が集中した奄美市住用地区では20日午前10時から午後1時までの3時間で、観測雨量が100年に一度と言われる雨量の1.8倍に相当する354ミリメートルに達した。奄美大島内の被害は、全壊10棟、半壊479旨、一部損壊11棟、

床上浸水119棟、床下浸水767棟、避難指示・勧告1,366世帯2822名 被害総額115億6,810円という甚大な被害状況となり、軽傷者1名、重傷者1名、残念ながら3名の方が亡くなった。

（2）災害放送の経緯

災害が発生した10月20日。この日は深夜から大雨が続き、土砂降りによる雨音が長々と止まず、不穏な空気には普段より早く目が覚め、スタジオへと向かった。6:45頃メールチェックすると、既に5:20に土砂災害警戒情報が発表されていた。普段よりリクエストをくださるリスナーからの画像付きメールが届いており、龍郷町自宅近くの道路の冠水という内容であった。



＜最初に届いたリスナーからのメール添付画像＞

その直後、奄美警察署より連絡があり、奄美北部の龍郷町、笠利地区の冠水、土砂崩れの情報が寄せられ、7:30からの生放送前に緊急放送として割り込み、道路交通情報、気象情報をアナウンス、引き続き朝の生番組「スカンマワイド」を開始した。番組内では、名瀬測候所担当者と電話でつなぎ、気象情報などを伝え、道路交通情報やリスナーからの各地の被害状況が画像付きメールで寄せられ、リスナー情報としてアナウンスすると、更にまた別のリスナーから、他の地域の情報が寄せられるという連鎖となった。一旦、朝の生放送は9:00で終了し、その後も通常のプログラムを進行しながら、度々割り込み、気象・道路交通情報をお知らせした。10:40には奄美市の災害対策本部が立ち上がったが、この時点で私たちは把握できず、独自の情報収集で放送を続けて行った。11:53には、記録的短時間

大雨情報が発表され、その後、正午からの昼の生番組「ヒマバンミショシーナ」を開始した。その最中、住用支所の知人からの画像付きメールが届き、ようやく被災規模が甚大かつ人命にかかわる状況であることを認識した。



＜住用支所の知人からの画像＞

急遽、生放送内で住用支所長と電話をおつなぎし、住用川の水位が上がり、車やバスが浮く状況まで冠水しており、事態は極めて深刻であることが伝えられた。その後、15:00過ぎあたりから、緊急災害放送として、連続した生放送を開始した。また、奄美市役所の災害対策本部へ担当者を1名常駐させ、情報収集と連携体制を図った。その後もリスナーからのメールでの各被害情報や問い合わせ等により、必要な情報を整理し放送した。例えば、このようなメールである。(メール原文まま) タイトル：至急！至急！／「住用の情報ありがとうございます！夕方の満潮時間が心配です！車内にいる人、住用の人だけではありません！車が止まってる所は三太郎トンネルから住用支所に向かう道路上で、よってみ亭（飲食店）とは逆方向です。横に三台並んで前にも後ろにもまだ他にたくさん車いるそうです！車内にまだみんな乗ってるそうです！地理もわからない人に避難って言っても・・・支所に行けないとなるとどこにいけばいいんでしょうか？車内の人の救出も忘れないで下さい！！防災無線聞こえないらしいのでこれからも情報お願いします。」という、切迫した内容のメールをお知らせ頂いた。至急、情報収集を行い、避難所や経路など現在地を推測し、整理してアナウンスした。その間も住用支所職員と携帯でのやりとりで情報を得ることができたが、16:00頃には不通となり、一般電話回線も寸断、携帯電話

基地局も水没し、やり取りが途絶えた。

この日20日深夜に近づき、得られる情報も減少する中、この時点からどのような災害情報を届けるべきかを考えた。各学校から帰れず、避難している子どもたちや先生。集落で孤立し、停電の中、眠れずにいる住民や避難所の人々。生放送を継続することで、その存在を認めることが伝わるのであれば、何かしら語りかけ落ち着いてもらえることが、今は大切な対処と判断し、そのまま生放送を続行し、音楽等も届けることにした。その楽曲等にも気を使い、できるだけ身近な存在を感じてもらうために、出身者の曲や少しでも気持ちを癒せる曲を届けた。被災地以外のリスナーも家族や知人・友人など関係者との連絡も途絶え、その都度、励ましのメッセージやリクエスト曲など頂き、一晩中、語りかけ朝を迎えた。その後もあまみエフエムへ、避難者の安否確認の問い合わせが殺到し、避難所の避難者名を伝えるべきと考え、災害対策本部とやり取りをし、ようやく、災害発生翌日21日21:22に住用地区の奄美体験交流館に避難している約100名の避難者の氏名を案内することができた。このことは後日、個人情報の関係で議論の対象となった。

災害放送の内容は、時間の経過により変化していく。各行政、警察、消防、電力会社、海上保安部、各地域、リスナー等から頂いた情報をもとに発生当日20日、気象情報、道路交通情報、被害状況、停電情報、避難所案内、電話不通状況、公共交通機関情報、物資提供情報、安否情報。翌日21日深夜からは、上記内容に合わせ、メールによる応援メッセージ、救出救助情報、スーパーなど店舗開店状況、ゴミ情報、土砂崩れなどの被災箇所へ近づく行為などへの二次災害への注意喚起などをお伝えした。



＜事務所内 情報収集と問合せ対応＞

災害発生から2日目に入り、ある程度長丁場となること

を予想し、限られたスタッフの人数で、情報収集と放送を行いながら、シフト体制を計画した。総指揮が1名、奄美市の対策本部に1名、情報収集対応に3名、パーソナリティ3名とオペレーター3名を1名ずつ1組とし、6時間交代で放送を行った。連続した災害放送は20日15時から24日の20時まで、5日間24時間続けることとなった。

(3) 各メディアとの結い

出来る限り情報や語りかけを届けたいと、さまざまなアウトプットを活用した。今回の災害が発生する10か月前、平成22年1月に行政100%出資によるNPO法人エフエムうけんが公設民営として開局。平常時からのあまみエフエムの朝・昼・夕の生番組を供給するネットワーク回線もつながっており、今回の災害発生時は、あまみエフエムとして奄美市エリアのみならず、奄美大島内5市町村の災害情報を届ける旨を伝え、必要の際はあまみエフエムの放送を活用頂くよう、災害放送ネットワークを提案した。実際エフエムうけんは、宇検村の防災無線をラジオ放送と連動させながら、災害情報をお伝えし、その合間にあまみエフエムの災害放送を活用頂いた。

また災害発生時、住用地区の道路冠水の画像付きメールが届いた際に知人の南日本放送の番組制作ディレクター北原由美さんへ報告し、報道部が動くこととなり、情報収集が始まった。その後もあまみエフエムとの情報共有を行った。更には、彼女は災害発生から3日後に奄美大島入りし、被災地取材班とは別にあまみエフエムの災害放送を密着頂くことになり、後日、放送され反響を頂いた。

災害発生初日の晩には、報道ステーションとパーソナリティ中原優子が電話で生中継し、被害状況などをお伝えした。この経緯なども中原が以前の東京の番組制作会社に勤務していた経緯があり、報道ステーションスタッフ内にその関係者がいたことによってつながり、東京キー局を通し、あまみエフエムが現地の被災状況を全国へ伝えることとなった。

更には、マスメディアを通して、被災状況を知り得た島外在住の奄美大島出身者の問い合わせ対応にも追われる中、島外にもリアルタイムに放送を届けるべきということと、島内の難聴エリア対策という手段と併せて、インターネットでの聴取可能な環境を施す必要があり、ユーストリームを活用し、リアルタイム放送を2日目から行い、多くの島内外の方々に届けることでした。

また、道路交通情報収集においては、国道、県道は鹿児島県大島支庁。市道、町道、村道などは各市町村に問い合わせ、その内容を集約し放送でお伝えしていたが、あるリスナーからの要望で、視覚的なものをホームページなどでアップして頂きたいという連絡があり、土砂崩れ、冠水などによる全面通行止めや片側通行、迂回路などを地図に落とし込みホームページに掲載した。この時点では、各機関の管轄ごとの情報案内はあったが、結果、奄美大島内の全ての情報を整理しまとめてお伝えしている内容は、あまみエフエムのホームページの道路交通情報のみであった。その内容をフェイスブックでも連動し、更には知人の運営する奄美群島情報ブログサイト「しーま」との連携も行った。

更には、島外にいる出身者などからの支援物資内容において、ツイッター上で情報が混乱しているので、地元からオフィシャル的な立場で要望と配送先等の情報がほしいと連絡があり、各自自治体に問い合わせ支援物資項目を整理し、あまみエフエムオフィシャルツイッターを設け案内した。

このようにできる限りのメディアをつなぎ、島内外で情報を共有する体制を整えて行った。

(4) リスナーの主観感情への理解とラジオの客観情報からの伝達の往来

奄美豪雨災害では、残念ながら3名の方が亡くなった。直後、テレビや新聞等で報道されたが、あまみエフエムの災害放送の中では、その情報は最後まで取り扱わなかった。その事実は被災地以外において、1:nという各メディアを選択し、能動的に情報を得ることができるが、一方、孤立集落や避難所で放送を聴取するリスナーにとって、1:1(あまみエフエムのみ)という限定的かつ受動的なリスナーであり、その情報・感情ニーズに対し、早急にまた優先的に必要な内容ではないと判断した。

今必要な情報は、安心し、安堵できる情報。それは何かと考える中、情報が得られないということに対し、不安を抱くリスナーにとって、各災害対策本部が確定した情報を整理し、届けられるまでの間、得られる情報が途絶えても、リスナーへ放送をつなげるということの中身を考えた。その中で、各所の準備段階など「このような方向へと進めている」というような表現内容により、途中経過情報も伝えた。また、各所被災地域の区長はじめ住民に電話でおつなぎし、現地の状況や心境を報告頂くことや、またリスナーが、普段ラジオ番組で耳馴染みの出演者などにつなぐこと

も試みた。その中でも「英会話のOVA」という番組に出演する龍郷町の中原フデコオバアなどに電話で生中継し、オバアの集落の状況が土砂崩れにより「泥んこまみれど～。ずーっと公民館にいるよー」などの状況を伝えてもらうことにより、被災地のリスナー同様、各地域にも被害があり、そのような境遇の中に共にあるという状況を認め合うことで、不安の共有が生まれ、更には安心、安堵へとつながるという一面を、確認することができた。

その後、時間が経過するにつれ、被災地の状況は落ち着き、集落独自による復旧復興という段階が始まりつつあった。ボランティア体制の準備、行政の動向、各メディアの表現、リスナーのリアクションなど、総合的にみて、20日から継続した災害放送は、5日目の週末の24日の日曜日の晩というタイミングで終了することを判断した。その晩、奄美市長へ放送出演依頼をし、被災地へのお見舞いと今後の復興へと向かう励ましのメッセージをお伝え頂き、連続した災害放送とネット配信を一旦終了した。その後、通常プログラムにその都度必要な情報をアナウンスする体制へと切り替えた。

あまみエフエムの災害放送が世の中の空気感や起きている状況の認識感覚を先導しているのであれば、明日25日月曜日の朝よりリスタート、復旧復興ムードづくりに努め、被災地の希望や精神的好転を生み出す必要があると考えた。翌日朝の生番組からは、通常通りのトーンに戻し、放送を行いながら被災地の情報やボランティアの募集、義援金等の情報を案内していった。

数日後、スタッフとともに住用地区へと復旧ボランティアに参加した。奄美市社会福祉協議会の窓口により、島内外から多数参加しており、各所被災箇所へ振り分けられ復旧作業を行った。あまみエフエムチームは住居の裏山の土砂崩れによる庭へと迫った土砂の撤去作業を行った。

私たちは災害発生時から、この日までスタジオの外の被災現場を直接見ることなく、リスナーや各関係機関との電話やメール、その添付された画像の情報だけを頼りに推測し、災害放送を組み立てていったわけである。

3、災害放送シンポジウム

(1) 計画無き災害放送の検証



＜事務所内の賞状のほとんどが豪雨災害関係＞

災害後、あまみエフエムの災害放送に対し、各所から賞賛の声や表彰状、感謝状を頂いた。災害時において結果的に映えた活動である。運営者としては、非常に心苦しい感覚に見舞われた。そもそも、島のアイデンティティ形成・感化をテーマに立ちあげたあまみエフエムは、災害によって存在意義や役割を認められる。それは、ラジオ局や災害放送に対し、「今まで無きものが、存在した。」という認識評価ではなかったか。そうであれば、「この存在するものは、確かな存在か？」と問うべきである。振り返れば、事前に万全に計画立てた災害放送ではなく、普段からのコミュニケーションネットワークによる災害放送の構築は、リスナーはじめ地域の方々、各関係機関とともに作り上げられたものである。更には局地災害。あまみエフエム自体は、被害なく行えた災害放送。次回へとスタンバイするのであれば、これはリスナーによって、ジャッジメント頂く必要があった。そのため災害放送に関する検証会を行い、リスナーや各関係機関に声をかけ、賞賛の場ではなく、各現場で聴取した際に、「もっと、こういう情報が必要だった。」「あのアナウンスは、分かりづらかった。」など、意見や要望を確認する場を設ける必要があった。

2010年10月20日、奄美豪雨災害。
この日、奄美大島では622ミリの雨量を観測しました。
10月の平均雨量が239ミリ程度であることをから、
この日1日で平均の3か月分の雨が降ったこととなります。
この記録的大雨は、3名の方の尊い命を奪い
島に甚大な被害をもたらしました。

私たち、あまみエフエムとエフエムうけんは
通常の放送ネットワーク体制を活用し
災害発生時の10月20日より24日までの5日間、
24時間体制で災害放送を行いました。

災害放送の内容として、奄美市対策本部・鹿児島県現地対策本部、
各所関係機関、そしてリスナーさまからの情報を頂き
避難所案内・交通・停電・通信等の各地の情報・安全確認、
応援メッセージ、ボランティア募集などの放送を行いました。

しかしながら、私達もすべてが試行錯誤の中での放送となり、
実際に放送を聞いて頂いた島の方々に
どれだけの有益な情報を放送する事が出来たのかは
不確かところです。

そこで、奄美豪雨災害からちょうど3ヶ月後の1月20日、
私たちの災害放送について、島のリスナーの方々、
また有識者の方々をお招きし、
ご意見ご要望を頂くシンポジウムを開催、
意見交換を行いました。

次に起こり得る災害への備えとし、
災害に強い島を作るためにも
私たちができることを考えたいと思います。
ぜひリスナーの皆さん、ご協力ください。

平成23年1月20日(木)
午後5時開場 午後6時開演
奄美観光ホテル4階 平安の間
奄美市名瀬港町2-10 電話(0997)52-2221

入場無料 入退自由

コミュニティ FM
災害放送シンポジウム
本当に役立ったのか？ 災害放送

コーディネーター 渡辺 実(防災・危機管理ジャーナリスト)
パネリスト 藤 憲吾(あまみエフエム・放送局長) 渡 博文(エフエムうけん・宇検村総企画課)
中原 優子(あまみエフエム・パーソナリティ)
ゲストコメンタリー 松岡 雄介(新潟県長岡・FMながおか代表) 前田 賢一郎(奄美市役所総務課)
日比野 純一(兵庫県神戸・FMわいわい代表) 堀山 廣市(奄美通信システム・代表)
長坂 俊成(独立行政法人防災科学技術研究所)
司 丸田 泰史(あまみエフエム・パーソナリティ)

主催 特定非営利活動法人 ディ！/あまみエフエム ディ！ウェイヴ
共催 特定非営利活動法人 エフエムうけん **協賛** 株式会社日本航空インターナショナル

特定非営利活動法人ディ！ TEL 0997-57-6366
〒894-0031 鹿児島県奄美市名瀬金久町4-3・2F FAX 0997-57-6367

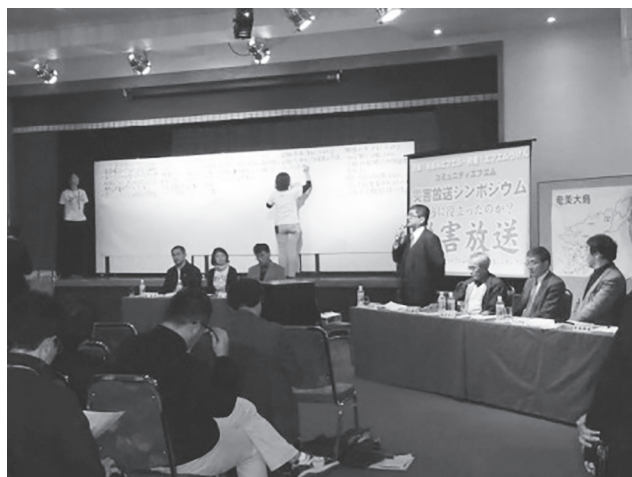
＜災害放送シンポジウムポスター＞

(2) リスナーからの生のメッセージ

災害からちょうど三ヶ月後、平成22年12月20日。

～あれから三ヶ月 奄美豪雨災害「災害放送シンポジウム」本当に役立ったのか？災害放送～と題し、あまみエフエム・エフエムうけんの共催により阪神淡路、中越・中越沖地震を被災経験したコミュニティFMの方々、防災研究関係者や放送技術者の方々に参加頂き開催、リスナー約200名の来場頂いた。

最初に災害放送の経緯を説明し、リスナーより自由意見で述べてもらい、ホワイトボードに記した。



＜シンポジウムの様子＞

その中で、コーディネーターの防災ジャーナリストの意見で、災害時における避難所名簿の読み上げにおいて、個人情報取り扱いに疑問視する意見があり、会場のリスナーからは、「案内してくれて、身内を確認でき安心した。」「ここは島コミュニティだから案内しても構わない。」「平常時からお互いが知り得ることが、安心な社会だ。」など意見を頂き、反省意見としては、「私は避難所に居たが、避難所から出た数日後も名前を呼ばれ続け、恥ずかしかった。」という意見もあった。このような避難時の状況をもとに、今後、避難所名簿記入欄に、放送等での公表意思の確認項目などが設けられることとなった。またその他の意見では、「道路交通情報などが伝えられたが、次の案内されるタイミングが分からない。」ことや、「迂回路案内が一部間違っており、渋滞を招いた。」などのリスナーの声を直接、顔を見合わせて頂いた貴重なご意見は、今後の災害放送の課題と私たちの糧となった。



＜リスナーからのご意見＞

4、奄美豪雨災害から生まれたこと

奄美豪雨災害を経験し、奄美のコミュニティFMとしての役割を再認識する機会を頂いた。

当時、あまみエフエムが災害放送を行う一方、マスメディアでの現地取材による被災地の悲惨な状況を島外へと伝える様子をスタジオのTVモニターで確認した際、私たちのあまみエフエムというコミュニティFMが、そのマスメディアの縮小版ではないことを認識した。私たちの立ち位置は、人々と共に暮らす土地、共に過ごす時間、共に感じる空間の中で、日々のコミュニケーションがあり、そこにコミュニティがあり、その共有、共感をコミュニティFMという手段で補完する役割と島社会の共同体の一部であるということを確認した。

またその後、奄美大島内のコミュニティFM開局は、各所に相次いだ。あまみエフエム、エフエムうけんに引き続き、平成24年4月に公設民営でエフエムせとうちが開局し、同年5月に隣接する大和村を鹿児島県の地域振興推進事業により中継局を2カ所増設し、あまみエフエムの聴取エリアが拡大。平成26年5月に民設民営でエフエムたつごうが開局し、島内では各所において何かしらのラジオ放送が聴取可能となった。更には、各局の技術サポートを行うNPO法人らじおさぼーとにより、各局のネットワークシステムが構築され、災害時は各局の回線をつなぐことができ、各所から災害放送が行うことが可能となった。

私たちあまみエフエムへは平常時、1日に10件足らずのメールが、豪雨災害時の5日間で約700通余り寄せられた。リスナーからのメールや問合せによって知り得た情報や、伝えるべき情報の気付きが多々あり、今後リスナーとの日常のつながりを密にするためにも「リスナーとの顔の見える関係性づくり」ということをテーマとした。各地域に取材等で伺うことはもちろん、私たちの拠点を対面販売という、コミュニケーションの象徴的な場でもある市場の一角に構えることとした。平成24年5月に開設した駄菓子屋兼サテライトスタジオ「末廣市場ディ！放送所」は、防音環境は一切なく、オープンスタジオで通りすがりの子どもたちや観光客など、いつでも放送に参加できる環境づくりを拓くことができた。



＜末廣市場ディ！放送所＞

5、さいごに

平成22年10月20日の奄美豪雨災害から約半年後の平成23年3月11日東日本大震災。奄美大島が被った災害は、一瞬にして色褪せるほどの甚大な被害に見舞われ、あの大規模な災害の状況下で長期に至る中、あまみエフエムは一体、何ができたのであろうか。想像するだけでも災害へと備える課題は山積である。その後、行政と共に防災訓練を行い、大地震、津波などを想定し、市役所内からの災害放送が行えるシステムを構築し、その他ハード面の課題も改善されつつある。地域社会において災害時の備えは、システムやマニュアル、訓練などの「型」は、大切である。併せて、それを活かす各人の存在意義や役割の意識「心」の感化、モチベーションづくりも必要である。

災害後、龍郷町の被災地戸口集落のある出来事を伺った。災害発生直後に体育館に避難してきた青年団の1人が、「隣の婆ちゃんが、まだ避難できていない！」と気付き、冠水した集落内を胸下まで浸かり、そのお婆ちゃんを背負って避難所へ連れ戻ったという。このような迅速な判断、行動に至るまでには、日常を通し、集落などでの行事、催事をはじめ、日々のコミュニケーションを通じて、おのおの存在、立ち位置、役割、役目を捉えており、また、利害や煩いを越えた共同社会の信頼関係を構築し、お互いに「伝えたい」「守りたい」「つなげたい」そのような関係性づくりが培われ、有事の際に機転し、状況を乗り越える意識「心」につながったと推測する。一方、その相対に「型」へと偏向する都会・街の利益社会の信用関係だけでは、そのような関わり合いを形成し難い意識「心」でもある。

私たちあまみエフエムでは、平常時よりリスナーとの情

報共有という「型」と、感情共有という「心」の二つの具体・抽象が相成る一元的調和の放送づくりを目指し、災害のためのコミュニティFMではなく、本来の目的である奄美のアイデンティティというテーマにおいて、人や地域を想う意識の照度を上げ、日々の暮らしを明るく照らし、豊かな営みを彩ること。そのことをリスナーとともにコミュニティを描くラジオ局でありたい。その連なりが、災害時に活かされる必要な情報・感情ネットワーク形成だと考える。

いざという時の「火事場の馬鹿力」のみならず、日々の「火の用心」と内省し、今後、島の結いのラジオ局として、人と想いを紡ぐことへと努めたい。

